



子どもたちに生きる希望を 子どもたちの心に耳傾けて

「尾北の子どもと教育を考えるついで」が、6月17日に江南市で開催され、教育講演会が行われました。今年度は、土佐いく子さん(和歌山大学講師、元小学校教員)を講師に招き、「子どもたちに生きる希望を子どもたちの心に耳傾けて」と題して講演をしていただきました。講演の要旨を紹介します。

子どもたちの今

土佐先生は、最初に、今の子どもたちの状況について、

「5歳児の虐待や新幹線内での殺人事件などに象徴されるように子育てや教育に関わる痛ましい事件が次々に起こっています。行為は決して許されるものではない。ただ、こうした事件の中には子どもも青年も大人も『自分の思いを受けとめてもらっていたのか』という大切な問題が関わっているのではないかと思うのです。」と語られました。



そして、

「現在接している大学生にも子どもたちと同じような状況がある。自分が嫌いで人間が信じられない、だから他とつながりたいという気持ちはあるのに孤立している。でも心の中では(誰か私の話を聞いて)と強く思っているんです。」

実際、今まで自分のことを出せずにきた大学生が自分の思いを私に語ってくれ、『今まで自分のつらい思いを話したことはなかった。こんなに自分の話を真剣に聞いてもらったのは初めてです。』と語ったのです。と話されました。

また、『今でさえ子どもたちは『よい子でないといけない、見捨てられるかもしれない』という思いがあるのに、道徳の教科化で評価されるようになると、ますますそういう思いが強くなるのではと心配しています。子どもらしさってどうなってしまうのでしょうか。』とも言われました。

けなげに生きる 子どもたち

「作文や日記は、子どもたちが一生懸命生きている証です。」と「おかあさんのこと」という作文を紹介されました。

おかあさんのこと
わたしのお母さんは、少し体が弱い
です。

今日のぼんでも、

目がくらくらして、天井がまわって、
目がもつてるわ。」

といて、おかあさんは、ねころん
でいました。

すると、お父さんが、
おけしようとしてあげるから、おけ
しようをとるクリームどのクリーム
や。」

といったので、お母さんは、
そのむらさき色のふたのクリーム
といました。

すると、お父さんが、クリームをと
って、お母さんの顔にあらっぽくっけ
て、顔をこすりました。

わたしも、お母さんのほっぺたをこ
すりました。

そして、お母さんは、起きました。
そしたら、お父さんが、ハンカチで、
顔のクリームをとりました。

お父さんは、じょうだんで、
今度生まれかわる時は、もっとい
いお金持ちとけっこんしいや。」

といました。
すると、おかあさんは、ちよっぴり
だけなきました。

わたしもちよっぴりないてしまいま
した。

小4女子)

「子どもたちはランドセルの中に日々のくらしをつめこんで、それを背負ってやってきます。」

子どもたちはこうした『暮らし』を背負いながら、本当にけなげに生きているのです。」と話されました。

子どもの「うが」「わかる」 「理解できる」とは

そして、土佐先生は、教育や子育ての悩みに応えるような形で次のような話をされました。

「長いこと教師してきたが、こんな子はじめてや」とか『わが子が何考えるかわからなくて』とか『子どもの本物の姿が見えにくくなった』という声をよく聞くようになりましたがなぜでしょうか。

それは、大人も忙しくて余裕がない中、競争主義的な教育の中で、我が子に対して負けてはならぬと高い期待をしてしまっている。一方で子どもたちはどうかというところ、大人は、自分たちの負の感情(いや・やめたい・行きたくない・泣く・痛い・むかつく・悲しいなど)を受けとめてくれない」と思っているのです。そういう負の感情を出さないでいるのです。だから『よい子』を演じている。我慢して感情を殺しているのです。」と話されました。続いて、

「大人は、子どもの話が聞けていないんですよ。大人は、『聞いている』つもりが『聞かせて』しまっている。大人ばかりが話している(指導・説教・しかる・指示など)。子どもは、『イライラオーラ』忙し

